嘆願劇における「憐れみ」と登場人物の行動の関わり

The relationship between *oiktos* and the characters' actions in the Supplication drama

矢越　藍子
YAGOSHI, Aiko

摘要

In the studies of Greek ethics it is still contested whether *oiktos*, the joint feeling of lament and compassion, would normally generate actions of the pitier. This paper aims to analyse the relationship between that feeling and the action of him and appraise the effect of that feeling enacted in Greek tragedy. It focuses on several scenes of supplication for there the relationship of the pitier and the recipient of pity is clear, and examines if the supplicated acts out of that feeling or otherwise. As a result we will see that *oiktos* was often used by suppliants as a means to getting help, but it is usually other elements that decide the actions of the supplicated party. Here we can glimpse their general idea that it was not advisable to take an action through the bare feeling of *oiktos*.

キーワード：*ギリシア悲劇　憐れみ　嘆願　共感性*
Keywords: Greek tragedy, pity, Supplication, compassion.

はじめに

古代ギリシアには宗教的な慣習として *hiketeia*（もしくは *hikesia*）と呼ばれる嘆願の儀礼があった。この儀礼の中で、嘆願者は神々、とくに嘆願を保護するゼウス・ヒケシオスの加護を受ける存在として扱われ、彼らの願いを拒否したり、暴力を持って嘆願者を排除することは神の報復を受ける行為と考えられていた(久保田,1994: p.77, Gould,1973: p.78)。自身で問題を解決する力のない嘆願者は神の後ろ盾を得ることで、自分よりも力を持った者と交渉することが可能となった。嘆願劇とは、国の中に設置された公共の祭壇や神殿を舞台に、嘆願者と庇護者の二者のやりとりが物語の中心となる劇のことである[(1)]。保護や支援を求め嘆願を行うのが嘆願者、訴えを聞いて嘆願を受入れるか否かを判断するのが庇護者である。嘆願は神の後ろ盾を得た宗教的な行為であったが、庇護者は必ずしも全ての嘆願を受入れる訳ではなかった。嘆願者の要求はしばしば現実

的な利害の判断によって却下されたり、感情的に拒絶されたりすることがあったのである[(2)]。嘆願が拒絶される可能性をはらんでいるのであれば、嘆願者は「ゼウス・ヒケシオスに保証された身分でも嘆願が受入れられないかもしれない」という懸念を抱いて嘆願に臨んでいたこととなる。結果が不確定な嘆願では、庇護者と嘆願者のあいだで受入れをめぐる問答が発生する。この問答では、嘆願者が庇護者に向けて憐れみを乞うことが一つな自然の流れとして考えられる。彼らは自分たちの悲惨な状況をアピールすることで、庇護者の憐れみを喚起し、嘆願受入れにつなげようとするだろう。またそれを受ける庇護者が、憐れみの訴えに影響を受けていたとしても不思議ではない。つまり、嘆願劇において憐れみは、嘆願の成否に関わる重要な役割を持ちうるものであったと思われるのである。

本論文では憐れみの感情が嘆願者と庇護者にどのような影響を及ぼしていたのかを明らかにするため、以下の方法で論を進めていく。まず第 1 節では、悲劇の「憐れみ」が先行研究でどのように論じられてきたのかを提示し、憐れみを表すギリシア語の持つニュアンスについて考察する。つづく第 2 節では、実際のテクストの中で登場人物の行動と憐れみの感情の関わりについて、嘆願者と庇護者の双方の視点から分析していく。そして第 3 節では憐れみの感情が嘆願劇に与えた影響を論じ、おわりに「憐れみ」が嘆願劇においてどのような意味合いを持つ感情として描かれていたのかを明らかにする。

１．悲劇の「憐れみ」についての先行研究

「憐れみ」を表すギリシア語は、一般的に *oiktos* と *eleos* の二語及びその関連語であるが、悲劇ではこの二つの言葉のうち *oiktos* とその関連語の使用率が 95%と圧倒的に多い（Sternberg, 2005: p.23）。これらの単語はどちらも悲しみを表現する泣き声に起源があると推測されている（Stanford.1983: p.23）[(3)]。*LSJ* によると、この二つの語はどちらも pity や compassion を表す意味の言葉として訳されているが、*eleos* には mercy、*oiktos* には lamentation といった固有の意味がそれぞれ与えられている[(4)]。しかしこの二つの「憐れみ」を語義で単純に分けることは難しい[(5)]。そのため、ギリシア語の憐れみを論じる際には、「憐れみ」をあらわす語に含まれるニュアンスに注意を向けなければならない。具体的には共感性の有無、赦しや救済の行動の有無のことだが、特に共感性を表す憐れみについては、先行研究でもとりあつかわれている。Stanford によると、ギリシア悲劇の *oiktos* と *eleos* は、pity よりも“Compassionate grief”と言った方が的確に表現できるという（Stanford, 1983: p.23-24）。Tnazetou は、嘆願劇で示される憐れみは「アテナイ人は他人の苦しみを思いやることができる」という市民的なイデオロギーの教訓を促すために描かれたものであるとしており（Tzanetou, 2005: p.118）、Johnson & Clapp は、悲劇の憐れみの共感は政治的判断を超えるものであり、*oiktos* と *eleos* は行動と分離させることができないと主張している(Johnson & Clapp, 2005: p.125)。

これらの先行研究はギリシア悲劇の憐れみが共感性を含んだ意味として使われていることには概ね同意しているが、それが行動を伴うものかについては意見が分かれている。憐れみに行動が伴ってくるかどうかという問題は、今回取り上げる嘆願劇においても取り扱われる。嘆願者の立場に立って想像してみると、その重要性がわかりやすい。嘆願者が憐れみを乞う場合、いくら庇護者がこちらの状況に共感し涙を流しても、赦しや救済といった行動が伴う憐れみを向けてくれなければ、嘆願者にとっては何の助けにもならない。嘆願劇では嘆願者が庇護者に救済してもらえるか否かが劇の展開と密接に関わっているため、彼らは積極的に相手に対して「憐れみ」の感情を喚起する場合がある。 Johnson & Clapp が主張するように、憐れみが行動と分離し得ないものであるならば、庇護者が憐れみによって嘆願者を受入れることもあり得るだろう、しかし果たしてこの仮定は正しいのだろうか。

Stanford によると、アテナイ人の compassion は悲劇に登場するアテナイの英雄、テセウスの人柄の中に体現されているという（Stanford, 1983: p.25）。テセウスは第 2 節で取り上げる嘆願劇四作品のうち二作に登場しており、嘆願者の受入れ判断の決定権を握る人物でもある。もし Stanford の提示するテセウス像が嘆願劇の中でも描かれているならば、嘆願の場面において憐れみの感情は、テセウスの判断に何かしらの影響を与えていると推測される。次の第 2 節では、*oiktos* とその関連語を中心に嘆願劇のテクストを読み解き、嘆願者と庇護者の行動がこの感情とどのような関わりを持つのかについて考察していく。

２．嘆願者にとっての「憐れみ」の役割

ここではギリシア悲劇の中でも嘆願場面が劇中で大きなウェイトをしめ、かつその嘆願結果が劇の展開に大きな影響を与えている四作品をとりあげる。具体的にはアイスキュロス『ヒケティデス』（以下 A. *Supp.*）、ソポクレス『コロノスのオイディプス』（以下 S. *OC.*）、エウリピデス『ヒケティデス』（以下 E. *Supp.*）、エウリピデス『ヘラクレイダイ』（以下 E. *Heracl.*）である。これら四作品の中で、作中の登場人物の行動と「憐れみ」の感情がどのように関わり合っているのかを検討する [(6)]。嘆願劇で重要となるのは嘆願者と庇護者の関係性である。前者は他国から舞台となる国に助けを求めて嘆願をしに来た者たちであり、憐れみの感情を向けられる者たちでもある。一方の庇護者は嘆願者が訪れる国の領主や市民たちであり、憐れみの感情を向ける者たちでもある。四作における嘆願劇の嘆願者と庇護者の態度をテクストに沿って分析しながら、憐れみの感情が登場人物の行動とどのように関わっているのかを考察していく [(7)]。

2．1.「憐れみ」を求める嘆願者

このセクションでは嘆願者が庇護者に憐れみを求めている三作品をとりあげる。まず E. *Supp.* では庇護者に対して積極的に自分たちの憐れさを訴えかける嘆願者が描かれている。嘆願者はテ

ーバイとの戦争に敗北したアルゴスの領主アドラストスと、彼に従い戦死した七人の将の母親たちである。彼らは将らの遺体がテーバイから返還されないことを嘆き、第三国のアテナイを訪れて遺体返還の手助けを求める嘆願を行う。庇護者はアテナイの領主テセウスと、その母アイトラからなっている。劇冒頭、嘆願者である母親たちがテセウスの母アイトラに向かって涙ながらの嘆願を行う。「両目から頬を伝う憐れな(**οἰκτρὰ**)涙を、そして皺のある年老いた肉にある手で切りつけた切り傷を見てください（E. *Supp*. 48-50）」と自分たちの痛ましさを強調し、「憐れな(**οἰκτρὰ**)状態にある私はあなたの息子に嘆願します（68-70）」と *oiktos* の関連語を使い、自分たちの憐れさを訴える。アイトラは嘆願受入れの決定を息子テセウスに委ねるが（38-42）、テセウスにはこの憐れみの訴えは嘆願者が望むような効力を発揮しなかった。テセウスは嘆願する母たちが大地に落とす涙を憐れな(**οἰκτρὸν**)ものと形容し（93-7）、アドラストスが憐れに(**οἰκτρὸν**)嘆いているのを耳にしていた（104）。嘆願者たちが憐れな状態であると認めつつも、テセウスは憐れみの訴えを無条件で受入れることはしなかった。なぜならこの後の場面で、嘆願者が犯した神々への不正行為が問題視されたためである。実はテーバイとの戦争の前に、アルゴスの予言者がこの戦争の敗北を告げていたのだが [8]、アドラストスはこれを無視し戦争を強行していた。159 行のテセウスの台詞にもあるように、予言を無視することは神々の意志を無視することであった。不正行為を指摘されたアドラストスはテセウスに 30 行以上に渡る長いスピーチを行い、憐れな(**οἰκτρὰ**)ものたちに目を向けるようにと、テセウスに強く訴えかける(168-79, 190-92)。彼の訴えに続けて母親たちも「憐れみを通じて（δι’ **οἴκτου**）私たちの運命を手に入れてください(193-94)」と懇願する。このアドラストスのスピーチとそれに続く母たちの訴えには、庇護者の憐れみの感情を喚起することで、嘆願受入れを促そうという意図がはっきりと見て取れる。しかしテセウスはこれをきっぱりと拒絶する。彼にとって憐れみの訴えは、不正行為をうやむやにしてまで優先するものではなかったのである。しかしテセウスが嘆願受入れを拒絶した直後、嘆願者たちは再び彼に憐れみを抱かせようと感情的な訴えを強める。特に母親たちが立て続けに 3 回 *oiktos* の関連語を使用する場面がある。

> みじめな私はあなたの膝と手に訴えます、どうか憐れんでください(**οἴκτισαι**)
> 我が子の嘆願者であり放浪者である私を
> 憐れな嘆きを (**οἰκτρὸν** ἰήλεμον) 憐れに訴える(**οἰκτρὸν** ἱεῖσαν) 私を。(E. *Supp*. 279-81)

ここで母たちは神々の祭壇ではなく、テセウス個人に対して嘆願を行っている。この強力な憐れみの訴えは彼らの無力な立場を浮き彫りにしている。戦力を失った王と、年老いた母たちは当然テーバイに対して対抗する力を持っていない。さらに彼らは助けを求めるテセウスに対して、代わりに差し出せる対価も持っていない。彼らには、神々の意思を蔑ろにしたという前科があり、神々からの憐れみや助けを期待することが難しい。そのため、嘆願者はひたすら庇護者にすがる

しか望みを繋げる方法がなかったのである。E. *Supp*. の嘆願者にとって、憐れみは庇護者の行動を促すための手段のひとつであった。劇冒頭から一貫して強く憐れみを求める嘆願者の姿から、嘆願者にとっての憐れみの感情の重要性を読み取ることができる。

二作品目の S. *OC*.にも、庇護者に憐れみを求める嘆願者が登場する。この悲劇では、前テーバイ王のオイディプスが国から追われ嘆願者となり、アテナイの領主テセウスが庇護者として嘆願を受入れる。この劇ではオイディプスが犯した罪が嘆願受入れの大きな障害となっている(255-57)。嘆願先のコロノスの住人たちは、罪を犯した嘆願者を受入れることを恐れ、神域から出ていくようにと命ずる。オイディプスとともに嘆願者となった娘アンティゴネは住人たちに憐れみを求めるが(242)、ここで住人たちは複雑な心中を吐露する、

いやわかってくれ、オイディプスの子よ、君とその男を
不幸の贈り物故に同じように私たちは憐れんでいるのだ(**οἰκτίρομεν**)。
しかし神々からの仕置きを恐れて私たちは
今言ったことしか言うことができないのだ。（S. *OC*. 254-57）

先に取り上げた E. *Supp.*では、庇護者による嘆願者への罪の糾弾が嘆願受入れの障害となっていた。しかしこの悲劇では罪を犯した嘆願者を受入れること自体に対する恐れの感情が受入れを阻んでいる。恐れを抱く住民たちに対し、オイディプスは「私の仕業とされているものは、私がしたことというより、被ったことなのだ (267-68)」と弁明を行い、彼らの恐れを軽減しようと試みる。住民たちは土地の支配者であるテセウスに判断を委ねることとするが、オイディプスはテセウスを待つ間にも何度も罪の弁明を行い、自分の行為は故意に起こしたものではないと繰り返し主張する（539,545-48）。この場面で嘆願者は、E. *Supp*. の嘆願者たちのように憐れみによる執拗な訴えは行わない、それよりも自分が穢れのない嘆願者であることの証明を優先したのである。またオイディプスはもう一つの証明も行っている、それは自身がアテナイにもたらす利益の証明である。彼は自分が「神聖な者、敬虔な者として、ここの市民たちに益をもたらす者(286-87)」であることを主張する。オイディプスがもたらす利益は、もう一人の娘イスメネが合流の際に伝えるアポロンの神託によって補強される。彼はアテナイの「大いなる救い手(459)」となろうと宣言できるまでに確信を持つのである。

オイディプスの罪の弁明と利益の証明のあと、住人たちは退去を求める姿勢から、嘆願の受入れへと態度を軟化させている。

オイディプスよ、お前と子どもたちは
憐れまれることが (**κατοικτίσαι**) ふさわしい。またお前自身がこの土地の
救い主であるとこの訴えに付け加えたので、

私はお前にとって幸運なことをお勧めしたいと望んでいるのだ。(S. *OC*. 461-64)

そして罪の弁明を終えたオイディプスの前にテセウスがやってくる。オイディプスは、やってきたテセウスに対して、*oiktos* の関連語を使って憐れみを訴えかけることはない。なぜならオイディプスの嘆願を妨げる問題は住人たちとの問答と神託によってすでに解決ずみであり、テセウスは登場直後すぐ彼の受入れを表明することができたからだ（560-66）。

S. *OC*. では嘆願者が憐れみに訴える姿は劇の前半に集中している。これは E. *Supp*. の嘆願者のように、憐れみによって庇護者に嘆願を受入れさせようと試みていたが故であった。しかしオイディプスの罪は予言を無視したアドラストスらの罪よりも大きく、憐れみを感じさせることには成功したものの、恐れが大きな障害となり、嘆願を受入れさせるものにはならなかった。憐れみによる訴えが効かないことを悟ってから、嘆願者は罪の弁明と利益の証明という新たな手段に切り替えている。この悲劇において、憐れみによる訴えは嘆願者が最初に取る手段として利用されていた。オイディプスやアンティゴネにとっても憐れみは嘆願受入れに関わる重要な感情であった、しかし嘆願受入れのためにはそれ以外の手段も積極的に使われており、憐れみばかりが庇護者を説得するための材料ではなかったことがわかるのである。

憐れみを求める嘆願者が現れる作品として三つ目に A. *Supp*. をとりあげよう。この作品では嘆願者が憐れみを求める相手が、庇護者ではなく神々であることが特徴である。この作品ではエジプトから逃げて来た五十人の娘たち（以下ダナイデス）とその父ダナオスが嘆願者となり、アルゴス王ペラスゴスに保護を求めて嘆願を行う。ダナイデスは父の兄弟であるアイギュプトスの五十人の息子たち（以下アイギュプティオイ）との結婚を拒否し、故郷のエジプトから船で逃れてくる。劇冒頭、彼女たちはゼウス神へ祈りを歌う中で、自分たちの悲嘆(**οἶκτον**)を憐れな(**οἰκτρᾶς**)ピロメラの姿になぞらえて、追跡者に追われる女たちの憐れさを表明している（A. *Supp*. 58-87）。そして逃亡先のアルゴスの祭壇に向かう前、父ダナオスから嘆願者の心得を説かれた彼女たちはゼウス神の祭壇で神からの憐れみを請う「ああゼウス様、我々を見て憐れんでください(**οἴκτιρε**)、私たちが滅ぶ前に」(A. *Supp*. 209)。

この悲劇の嘆願者は E. *Supp*. の嘆願者と女性の集団からなるという共通点を持つものの、嘆願に到るまでの事情は全く異なっている。まずテーバイの母たちが求める「戦死者の遺体返還」は神々の掟として宗教的な大義名分を持つ行為であったが（E. *Supp*. 17-9）、ダナイデスが拒む「アイギュプティオイとの結婚」は神々の掟に抵触するような行為ではなかった。彼女たちはいとことの結婚を嫌がっているが、338 行のペラスゴスの台詞にもあるように、いとこ同士の結婚は特に忌避されるものではなく、むしろ推奨されることでもあった。悲劇が上演されたアテナイでも、裕福な家々では親族のつながりを強めるためにいとこ婚が進んで行われていた（Wesley, 1967: p.281）。つまり血縁の近さは結婚を拒否する理由として一般的ではなかった。ダナイデスはアイギュプティオイの神々への不敬虔さを指摘し(9-10)、傲慢さを非難している(30)が、彼らの何が

神々を蔑ろにする行為なのかについて具体的なことは語っておらず、彼女らの宗教的な大義名分の有無はあやふやなままになっている。このあやふやさはペラスゴスとの問答にも影響を及ぼしている。彼女たちは祭壇でペラスゴスに対して保護を求め、アイギュプティオイに身柄を引き渡さないようにと嘆願する。ペラスゴスはダナイデスに結婚を拒む理由が感情的なものか、宗教的なものかを尋ねる(Bowen, 2013: p.218)が、ここでも彼女たちは具体的な返答を返さない。嘆願者は正義の女神ディケの名を出し、宗教的な正当性があることを主張するが、ペラスゴスはこれに確信を持つことができない(343-44)。また嘆願者はテミス女神(360)、ゼウス神(381-86)の名も上げてペラスゴスに嘆願者の守り手となるよう繰り返し要求する。庇護者に憐れみを求めるのではなく、神々の威光を盾に嘆願受入れを迫る姿は、他の嘆願者にはみられない特徴的なふるまいである。

なぜ彼女たちは神々に憐れみを求める一方で、庇護者に憐れみの訴えを行わないのだろうか。その理由は、嘆願の成否の鍵を握るのが庇護者ではなく神々であると、嘆願者が強く認識していたためだ。彼女たちは劇冒頭で神々、特にゼウス神を頼みにする言葉を口にしつつも、ゼウス神の下す計らいに不安を抱いている(77-90)。それは、果たしてゼウス神は結婚から逃げる女たちを助けてくれるのだろうか、という不安だ。彼女たちがゼウス神からの助けを確信できないのは、「結婚の拒否」を望むことがすなわち結婚を司る神の拒否につながる行為だという自覚があったためである。劇終盤、アルゴスの市民たちの投票によって嘆願が受入れられたダナイデスは、処女神アルテミス女神に「憐れんで見てくださいますように(**οἰκτιζομένα**)」と憐れみを求めながら、恋愛を司るアフロディテ女神を拒絶する発言をしている(1030-33)。結婚はヘラ女神やアフロディテ女神といった結婚を司る神々の加護を受ける行為でもあり、これを正当な理由なしに拒否することは、その神々を蔑ろにする行為でもあった。悲劇『ヒッポリュトス』でも描かれているように、一方の神を崇めつつ他方の神を蔑ろにすることは、蔑ろにされた神の怒りを招く行為であった。

ダナイデスにとってゼウス神は嘆願を保護する神であると同時に、結婚の拒否という望みを審判する神でもあった。もしゼウス神が彼女たちの要求を認めず、結婚の拒否は神を蔑ろにする行為だ、と判断したならば、たとえ彼女たちがアルゴスで嘆願者として受入れられても、神々の何らかの罰を免れることはできない。彼女たちにとって嘆願の成否の鍵を持つのは庇護者ではなく、神々であったのだ。そのためダナイデスにとっては、嘆願者として庇護者に受入れられることよりも、神々に認められることの方が優先すべき課題だったのである。結局、彼女たちの嘆願はアルゴスに受入れられることとなった。庇護者に憐れみの訴えをせず、神々の権威をふりかざし強引に嘆願を受入れさせようとした嘆願者は、ペラスゴスの機転によってアルゴス市民にも憐れみを求めることで嘆願に成功したのである（480-89, 639-42）。だが、彼女たちの憐れみの訴えが神々に聞き届けられたかどうか、この劇は答えがでないまま終幕を迎える。

A. *Supp.* を「嘆願者が誰に憐れみを求めているのか？」という視点で考察していくと、この悲

劇では、嘆願者と庇護者と神々の間がねじれた関係になっていることが見えてくる。これまでの嘆願劇では基本的に＜庇護者-嘆願者＞と＜憐れむ者-憐れまれる者＞のという二者の関係はほぼ重なり合っていた。しかし嘆願者が憐れみを神々に求めるこの劇では、庇護者が憐れむ者にならず、嘆願受入れの手段のひとつである憐れみの訴えが嘆願場面で発生しないという事態を生み出していた。ただし、嘆願者が憐れみを訴える相手が異なっていても、上記２作と同様憐れみの訴えが、嘆願者が取ることのできる重要な手段の一つであったことは確かであろう。

2. 2.「憐れみ」を求めない嘆願者

上記に挙げた３つの劇と一線を画す嘆願者が登場するのが、E. *Heracl.* である。この悲劇には憐れみを求めない嘆願者が出てくる。嘆願者は英雄ヘラクレスの子どもたち（以下ヘラクレイダイ）と、ヘラクレスの母アルクメネ、そしてヘラクレスの甥で彼らを引率する老人イオラオスからなっている。彼らはアルゴス王エウリュテウスから命を狙われ、亡命者としてアテナイのアゴラ（広場）にあるゼウス神の祭壇にすがり、保護を求めて嘆願を行う。この悲劇では *oiktos* の関連語の使用回数は５回と、今回取り上げた嘆願劇の中では最も少ない。回数以外に特徴的なのは、５回のうち嘆願者が *oiktos* の関連語を使用することが一度しかないということだ。この劇の嘆願者が憐れみの訴えを行っていないのには大きく分けて二つの理由が考えられる。一つは彼らが神に対する不正行為を犯してはいないという点だ。彼らはエウリュステウスによって着せられた無実の罪によって亡命者となったのであり、これまでの嘆願者のように神々の意志を蔑ろにするようなことをしてはなかった。そのため彼らは人の法に鑑みても、神々の掟から見ても自分たちの合法性を主張することができた。二つめは彼らがヘラクレスの子孫であるという矜持を強く持ち、あからさまに憐れみを誘うような態度をとることを恥としたことにある。この姿勢が最も現れているのがヘラクレスの子どもの一人、少女マカリアの台詞である。

ありえません、間違いなく笑われるに値することです、
神々の嘆願者として座って泣くことは、かの父から生まれたとはいえ
私たちは臆病に見られることとなるでしょう。
そのことはどのように良き人たちの中で映るでしょうか？（E. *Heracl.* 507-10）

マカリアは、「アルゴスとの戦争に勝つには良家の娘を犠牲に捧げる必要がある」との神託を受け嘆願受入れの是非を巡って紛糾するアテナイに、自分を犠牲とすることを求め、死を恐れず身を捧げた少女である。彼女の態度は、E. *Supp.* の嘆願者と比べると対極の態度とも言える。上記の台詞の中には二つの要素が含まれる、一つは自分の価値を認め矜持を持っていること、もう一つは外聞を気に掛けていることだ。この二つの要素を持つよく似た台詞はプラトン『ソクラテスの弁明』にも登場する。アテナイの法廷で死刑判決を受けたソクラテスが、同情を買うための嘆願

を行わなかった理由をアテナイ市民に説明するのだが、ここで知恵・勇気、その他の徳といった特性を持つものが嘆願を行うことの見苦しさを説いている(9)。逆に見れば嘆願を行わないソクラテスは、それらの徳が自分にあると自負しているということになる。マカリアがソクラテスと似た主張する背景にも、おそらく同様の自負が存在していると考えられる。神々から与えられた難行をこなした英雄ヘラクレスの子であるという自負をマカリアは持ち、それにふさわしくない振る舞いを非難しているのである。ソクラテスとマカリアは自分たちが持つ矜持に合わない行動を否定しているが、もしかするとこの二人の台詞の中には外聞も気にせず憐れを乞う人たちを非難する気持ちが多少含まれているかもしれない。しかし彼らが行おうとしているのはこれまでの嘆願者の否定というより、新しい嘆願者像の体現であると言ったほうが適切であろう。

そして E. *Heracl.* にはマカリアだけではなく、もう一人これまでと異なる態度を示す嘆願者がいる。それはヘラクレイダイを率いる老人イオラオスである。彼はマカリア同様憐れみを乞うようなことはせず、自分たちを連れ戻しにきたアルゴスの使者にも涙ではなく言葉で反論をしている。また物語の終盤、アルゴスとアテナイの戦争が始まるとイオラオスは老人ながら自ら戦場に出ることを決意し、周りの静止も振り切って武具をまとい戦いに赴く。死を恐れず自ら積極的に困難に立ち向かうマカリアとイオラオスの姿は、これまでの助けを求めるばかりの嘆願者像とは異なっている。彼らは他の嘆願者同様に自分たちだけで困難を克服する力は持っていないが、問題から逃げずに迎え撃つ勇敢さを持ち合わせている。この勇敢さは自分の信念を曲げず、死刑のおそれがあっても法廷に立ったソクラテス像とも共通する。彼らの勇敢さとは、自分の価値を自負するが故にその価値に見合った行動をしようとした結果生まれるものである。外聞を気にするのも、価値に見合わない行動をとることを避けるが故だ。この劇の嘆願者は、涙を流して嘆願することは臆病者のすることだと考え、憐れみによる訴えを自覚的に拒否している。彼らは嘆願の成否よりも、自身の矜持に見合った行動をとることを優先し、憐れみによる訴えを行わないのである。

2. 3. 嘆願をすることと、「憐れみ」を求めること。

以上、四作の嘆願劇をとりあげ嘆願者の行動と憐れみの感情の関わりを考察してきた。嘆願劇において、嘆願者は軍事的な力に抵抗出来ない弱者から構成されており、富や武力を持たない力の弱い嘆願者にとって、憐れみは力を持たぬものでも訴えることのできる手段であった。憐れみを求める相手は、庇護者や神々など嘆願者が抱える事情によって異なっているが、彼らが嘆願者より大きな力を持つ者たちであるということは共通している。ここで注目すべきは、嘆願することと憐れみを求めることが、いつも一緒に行われたわけではなかったということだ。E. *Heracl.* のように憐れみを乞うことを恥としてあえて行わない嘆願者もいれば、A. *Supp.*や S. *OC.* のように憐れみ以外の手段を利用して嘆願受入れを狙う嘆願者もいた。しかし基本的には、庇護者の心を動かし嘆願受入れの行動につながる可能性を持った憐れみの訴えは嘆願における有望な手段の

ひとつであった。S. *OC.* において、父を頼って嘆願にやって来た兄に対するアンティゴネの次の台詞には、対話における感情の有用性が語られている。

言いなさい、不幸な人よ、あなた自身が何を必要としてやってきたのかを。
なぜなら楽しみになるような、我慢できなくなるような、
憐れみを引き起こすような(**κατοικτίσαντα**)多くの言葉たちが、
それらが喋らぬものたちに言葉を発することを許すのですから。(S. *OC*. 1280-83)

庇護者との対話において、憐れみの感情に訴える嘆願者たちの論理がここに集約されている。

一方で、アリストテレスは『弁論術』において、それに対する警告とも取れる意見を述べている。

怒りや妬み、あるいは憐れみへと裁判員を促して丸め込むことなど、あってはならないのである。それはちょうど、これから使おうという物差しを歪ませるに等しいのだから。(Arist. *Rh*. 1354a20-30. 堀尾訳)

これは、法廷の場を念頭に置いたものであるが、感情の訴えを受けるという意味では、庇護者側からみた見解であると言える。では実際、嘆願者から憐れみの訴えを受けたとき、庇護者はどのような反応を示していたのだろうか。

３．庇護者と「憐れみ」

3．1．嘆願者の「憐れみ」に対する庇護者の反応

S. *OC.* では、物語序盤で庇護者であるコロノスの住人は何度か嘆願者への憐れみを表明していた。一方、嘆願受入れの最終決定権を持つテセウスが、*oiktos* の関連語を使って憐れみを表明することは一度しかない。彼が嘆願を受入れたのは、オイディプスに対する共感と、オイディプスがもたらす利益の存在によるところが大きい。テセウスは生い立ちの共通点からオイディプスに共感を覚え(562-66)、そんなオイディプスが嘆願者となっていることに無常感を抱き[10]、さらにその気持ちを深めている(576-78)。そんなテセウスに対し、オイディプスは自身の体が利益になることを語り、嘆願者を受入れることのメリットをテセウスに提示する。テセウスはこの申し出を受入れ、オイディプスを嘆願者として受入れることを決定するのである。このやりとりは、涙を流すような強い憐れみの感情を伴っては描かれていない。この劇では、憐れみは嘆願受入れの決定的原因としては描かれていないのである。

E. *Supp.* でも同じくテセウスが庇護者として登場する。この劇にはテセウスと母アイトラが庇

護者の立場で登場するが、この 2 名は劇の中で対照的に描写されている。194 行までの力強い憐れみによる訴えを聞いてアイトラは涙を流し、テセウスに嘆願を受入れるよう説得を行う。ここで彼女は嘆願者とは異なり *oiktos* を喚起させるようなアプローチは行わない。アイトラは嘆願者の憐れな有様には言及せず、嘆願を拒否した場合にアテナイが被る不名誉と、受入れた際に得られる名誉を引き合いに出してテセウスを説得している。ここでは嘆願者の感情的な訴えとは異なり、合理的な利益による説得を行っている。テセウスはアイトラのこの提案を受入れる形で嘆願者の要求を了承する。この劇では一見すると嘆願者の *oiktos* の訴えが成功し、嘆願が受入れられたように見える。しかし二人の庇護者のふるまいをみてみると、*oiktos* の訴えが効果があったのは母アイトラのみである。テセウスは嘆願者に *oiktos* を表明しつつも、この感情によって嘆願受入れの判断を行っていない。嘆願者の保護を決定的にしたのは嘆願者が求める神の掟を守ることでアテナイが得られる名誉という利益であった。

E. *Heracl.* では、テセウスの後継者デモポンと、神殿のあるマラトンの町の住人たちが庇護者として登場している。住人たちは嘆願者に憐れみを表明する(127-29, 232-35)が、デモポンの台詞の中に *oiktos* の関連語は登場しない。この劇では、憐れみによって嘆願を受入れることの不利益が語られる(150-61)。不利益を説くのは、嘆願者を連れ戻しに来たアルゴスの使者である。使者はデモポンに、もし嘆願を受入れればアルゴスとの戦争が発生すると警告する。だが、デモポンは使者の警告に恐れを抱き、嘆願者に憐れみを向けなかったのではない。それよりも、第 2 節で取り上げたように、この悲劇の嘆願者が憐れみの訴えを行わなかったことが主な理由の一つだろう。イオラオスはアテナイが自由を認める国であることと、アテナイ人が正義と恥の気質を持つことを讃える。そして嘆願者と庇護者の祖先たちを通じて、デモポンとヘラクレイダイの間に血縁と恩恵関係があったことを示し、嘆願を受入れるように説得するのである。デモポンはイオラオスの主張を採用し、嘆願受入れを決定する。デモポンは E. *Supp.* のテセウスと同じく憐れみによって嘆願受入れを判断していない。彼もまた、父と同じく嘆願受入れによって得られる名誉を重要視している。嘆願受入れの後、イオラオスによって「ギリシア中に父祖の名誉を保ち父の名に劣ることがない(324-25)」と称えられたことに、デモポンは大きな喜びを表しているのである。

ここまでの三つの作品の庇護者には共通点がある。まず嘆願受入れの決定権を持つのはどれもアテナイの支配者であること。支配者たちは憐れみの気持ちをあらわにすることもあるが、それよりも嘆願を受入れることで得られる名誉や利益を重要視して嘆願を受入れているということだ。そして三つの悲劇には、支配者ではない他の庇護者たちが積極的に憐れみを表明しているという点も共通している。

嘆願劇の中で唯一アテナイ以外の庇護者が登場するのが、A. *Supp.* である。この劇でも、支配者は憐れみを表立ってあらわさず、他の庇護者が憐れみを表明するが、そこに至るまでの事情は他三劇と異なっている。アルゴスの支配者ペラスゴスは嘆願者から憐れみによる訴えを受けなかったが、代わりに嘆願を守護するゼウス・ヒケシオスの怒りと、ダナイデスの自殺のほのめかし

による脅しを受けていた。嘆願者にここまで強い脅しを受けた庇護者は他の嘆願劇には見られない。さらにペラスゴスは嘆願受入れによって得られる利益を嘆願の問答の中で見出すことができなかった。上記で取り上げた他の悲劇の庇護者たちは、嘆願者から名誉や自国の保護などの利益を提示され、それが嘆願受入れを決定づける理由となっていた。しかし、ダナイデスはそのような提案をほとんど行っておらず、逆に受入れなかった場合の不利益ばかりを強調していていた。ペラスゴスは利益を取って嘆願を受入れるのではなく、不利益を回避するために嘆願を受入れたのである。これはアテナイの支配者たちと比べると、ずいぶんネガティブな動機である。ペラスゴス自身もそのことを自覚しており、彼は市民たちに嘆願受入れの同意を求める際、自分の言葉で説得することを回避している。利益どころか、戦争という自国にとってあきらかな不利益をもたらす嘆願者の受入れを市民に決定してもらうため、彼が利用するのが憐れみである。彼は市民の前で嘆願を行い、彼らの憐れみを掻き立てるよう、嘆願者に命ずる(480-89)。その結果、A. *Supp*. は嘆願劇の中で唯一、憐れみの感情が嘆願受入れの決定打となった。しかしこの憐れみも本来決定権を持つ国の指導者が示したものではなく、それ以外の庇護者、市民たちによって示されたものであった。

3. 2.「憐れみ」に動かされない指導者たち

国家の指導者にとって、嘆願は個人間の問題ではなく、国家的な問題であった。嘆願者に対するペラスゴスの台詞にはその認識が顕著に現れている。

あなた方は私の家の炉端に座っているのではないのだ。
もしポリスがまとめて穢れを受けるようなことがあれば、
人々が共同で解決策を為そうと努めなければならない。（A. *Supp*. 365-67）

指導者たちは嘆願受入れの際、嘆願者を守護するゼウス・ヒケシオスが求める宗教的な義務の履行と、国家の安全の確保の間で板挟みになる。国家規模ではない個人間の嘆願であれば憐れみの気持ちを優先させ、嘆願者を保護するという選択もとれるだろう。しかし国を巻き込む問題となれば、判断を間違えた場合の報いは、より大きなものとなる。それを示すように、悲劇では憐れみによって指導者が方針を決定した結果、身を滅ぼすような結末を迎えるパターンが存在する。A. *Supp*. は三部作からなる悲劇の一作であり、残り二作は完全な形で現存していないが、続く劇ではアルゴスとエジプトの戦争とペラスゴスの戦死、ダナイデスとアイギュプティオイの結婚が描かれていただろうと推測されている[(11)]。嘆願劇の中で唯一憐れみによって嘆願を受入れたペラスゴスは、嘆願受入れ後の戦いにも勝利したアテナイの指導者たちとは対照的に、死という望まぬ結果を受けてしまうのである。

また嘆願劇とは異なるが同様の結果を受けた一例として、ソポクレス『オイディプス王』(以下

S. *OT.*)の悲劇がある。この悲劇ではテーバイ王オイディプスが市民からの嘆願を受け、国の穢れの原因となった先王ライオスの殺人犯の捜索に乗り出す。オイディプスは「座り込むものたちに憐れを向け(**κατοικτίρων**)なければ私は冷酷な奴と思われるだろう(S. *OT.* 13)」と嘆願者の願いを聞き、「おお憐れな（**οἰκτροί**）子らよ(S. *OT.* 58)」と憐れみの気持ちを表明する。嘆願劇と異なり憐れみを向ける対象は他国人ではなく、自国の国民であるが、ここでオイディプスは「*oiktos* によって嘆願受入れを行う指導者」として描かれている。実は知られざる殺人犯は過去のオイディプス自身であった。彼は市民のため殺人者を探す中で、知らずに父殺しと母と近親姦を犯していた事実を知り、自ら両目を潰してしまう。憐れみによって行動を移したオイディプスは盲目となり、祖国を追放されてしまう。悲劇の中では、このように憐れみによって嘆願を受入れた結果、身を滅ぼす指導者が描かれることがあった。

その一方で、憐れみなどの感情に流されず、理性的に行動する指導者が理想的に描かれることもあった。このような指導者は、指導者以外の庇護者が涙を流す場面で共に嘆くようなことはせず、嘆願者の姿や言葉に安易に引きずられることもない。S. *OC.* では、涙を見せないテセウスの姿が以下のように語られている。

> すると彼（テセウス）は、よき生まれの男のように、悲嘆(**οἴκτου**)を伴わずに
> 客人にこれを行うということを誓って約束したのです。（S. *OC.* 1636-37）

涙を見せない彼の姿はよき生まれの男がとる理想的な振る舞いとして描写されているのである。

また、この理性的な指導者像は男女の振る舞いの違いによっても浮き彫りになっている。先ほど引用した S. *OC.* の台詞は、死を予見したオイディプスが、テセウスが見守る中、家族と別れを告げる場面で登場する。この別れのシーンでは泣き叫ぶオイディプスの娘アンティゴネたちと、涙を流すことなく死に向かうオイディプスを見送るテセウスの振る舞いが対比的に描写されている。この涙を流す女性と流さない男性の対比から、感情的な判断を行わない冷静な指導者像が浮かび上がってくる。同様の対比は E. *Supp.* のアイトラとテセウスの振る舞いにも現れている。

憐れみに対する指導者の振る舞いとその結果を見てみると、*oiktos* に関わる感情と政治的判断を分けることのできた指導者たちは、破滅的な結末を回避できていると言う事ができる。指導者は *oiktos* に関わる憐れみの感情をすべて否定しているわけではない。E. *Supp.*のテセウスのように、言葉でその感情を表明することはある。しかし憐れみは嘆願受入れの決定的要因になることはほとんどなく、あったとしても嘆願を受入れた者に破滅的な結果をもたらすことになった。嘆願劇の中で賢明な庇護者たち、特にテセウスやデモポンといったアテナイの指導者たちは憐れみの感情と政治的判断を切り離して考えていた。彼らは嘆願受入れの際には、自国や自身が受ける名誉などの利益の確認を行い、そして嘆願者が求める要求が神々や国家の定めに違反していないかという合法性を審査し、利害のバランスをとりつつ判断を行っていたのである。

おわりに

以上、憐れみの感情と、嘆願者と庇護者の行動との関わりを考察してきた。嘆願劇は嘆願というテーマの性質上、憐れみの感情が発生しやすい。*oiktos* の関連語があらわす「憐れみ」には、先行研究で示されたような共感の気持ちがあらわされていた。ただし、＜庇護者-嘆願者＞の関係は、＜憐れむ者-憐れまれる者＞という関係とまったく重なり合うものではなかった。嘆願者は庇護者に憐れみを求めず神々に求めることもあったし、まったく憐れみを求めない嘆願者も存在していた。また庇護者も、憐れみを向ける者もいれば、向けない者もおり、両者が一つの劇の中に同時に存在していることもあった。

嘆願者にとって、憐れみは嘆願を受入れさせるための手段の一つであった。特に、脅しやなだめすかしなど、他の手段を取ることが難しい嘆願者が、憐れみを重視する傾向があった。嘆願受入れの対価として、武力や富を差し出すことのできない嘆願者にとって、憐れみの感情に訴えることは、庇護者の行動を促すために利用できる最終的な手段であった。憐れみを求める嘆願者たちは、自分たちの悲惨さを涙や言葉であらわし、名誉や矜持を捨ててでも嘆願を成功させようとする。しかし一方で E. *Heracl.* に描かれていたように、名誉や矜恃を保つことを重要視し、憐れみを求めない嘆願者も存在していた。憐れみを求めない嘆願者は嘆願劇では例外的な存在であったが、彼らの持つ価値観は 2. 2. で取り上げた『ソクラテスの弁明』で述べられてる内容と近しい物であった。

また、憐れみを嘆願受入れに活用しようとする嘆願者たちに対して、庇護する側の最終的な態度は概ね一致していた。彼らは憐れみの感情を表明することはあっても、それを嘆願受入れの決定的要因とはしなかった。最終的に憐れみの感情を用いて嘆願受入れを決定させたペラスゴスにしても、決定権を市民たちに委ねることで、自らの「憐れみ」を表明することは巧みに回避している。指導者は、嘆願者の求める「憐れみ」に一切心を動かされなかったわけではない。S. *OC.* において指導者テセウスは、オイディプスを憐れんで嘆願の内容を話すように促している（555-559）。また E. *Supp.* では、憐れみによって心を動かされた庇護者のアイトラが、嘆願を受け入れさせるために最終決定権を持つテセウスを説得するという行動に出ている。憐れみは、指導者以外の人物たちの心を動かし、それが間接的に嘆願受け入れの一助となることはあった。この点で Johnson & Clapp の「*oiktos* と *eleos* は行動と分離されない」という主張は成立する。しかし憐れみの感情を表明することも、その感情に動かされ行動を起こすのも、受入れ決定権を持つ指導者以外の人物であることが大半なのである。つまり、憐れみは嘆願受け入れを最終的に決定させるような、強い効力は持っていなかったのである。

ではなぜ、憐れみの感情は嘆願受入れの際に決定的な効果を発揮できなかったのであろうか。その理由は 2、3 節でとりあげた嘆願者、庇護者双方の行動分析から見えてくる。注目すべきは、憐れみを乞わない嘆願者が、名誉を重視する勇敢で理想的な人物として描かれているこ

と。そして憐れみによって行動決定することを避ける指導者たちも、名誉を重視する勇敢な人物として描かれていることである。おそらくこの両者の行動の背後には、「憐れみの感情によって相手を動かす、動かされることは理想的ではない」という価値観があることが推測される。推測の根拠は二つある、まず一つは同じような価値観が悲劇の中のみならず、先に取り上げた『ソクラテスの弁明』や『弁論術』といった、哲学者たちの警句にも存在していること。そして二つめは、悲劇の中で、憐れみで嘆願受け入れの最終決定をしない指導者と、憐れみで嘆願受入れをした指導者の結末が対比的に描かれていたことである。前者の指導者にあたるアテナイの指導者たちは、憐れみ以外の理由で嘆願を受け入れた結果、勝利や名誉といった益を受けることができた。しかし後者の、憐れみで嘆願を受けれてしまった指導者、A. *Supp.* のペラスゴスは敗戦や死といった悲惨な運命に遭遇している。嘆願劇以外でも、S. *OT.* のオイディプスは、指導者として市民たちの嘆願に憐れみによって答えた結果、破滅的な結末を迎えている。

悲劇が上演されたアテナイにおいて、憐れみは常に良きものとして扱われていたわけではなかった。憐れみは共感性をもち、人の心を動かし得る感情であるが故に、合理的判断を誤らせる可能性もはらむものとして描かれていたのである。

参考文献

[一次文献]

Diggle J., *Euripidis Fabulae, t. 1: Cyclops; Alcestis; Medea; Heraclidae; Hippolytus; Andromacha; Hecuba*, (Oxford, 1984) (Oxford Classical Texts).

Diggle J., *Euripidis Fabulae, t. 2:Supplices; Electra; Hercules; Troades; Iphigenia in tauris; Ion*, (Oxford, 1981) (Oxford Classical Texts).

Mazon P(tr.), *Sophocle. Tome ii: Ajax; Œdipe Roi; Électre*, (Paris, 1997) (Collection de Budé).

Mazon P(tr.), Sophocle. Tome iii: *Philoctète; Œdipe à Colone*, (Paris, 1960)(Collection de Budé).

Murray G., *Aeschyli Septem quae supersunt Tragoediae,* (Oxford, 1955) (Oxford Classical Texts).

［邦訳］

今林万里子・田中美知太郎・松永雄二（訳），『プラトン全集 1』,（岩波書店, 1985 年）。

池田黎太郎（訳・解説）, エウリピデス『ギリシア悲劇全集５』,（岩波書店, 1990 年）。

岡道男（訳・解説）, アイスキュロス『ギリシア悲劇全集２』,（岩波書店, 1991 年）。

岡道男（訳・解説）, ソポクレス『ギリシア悲劇全集３』,（岩波書店, 1990 年）。

木曾明子（訳・解説）, ソポクレス『ギリシア悲劇全集４』,（岩波書店, 1990 年）。

高津春繁（訳・解説）, アポロドロス『ギリシア神話』,（岩波書店, 1978 年改訂版）。

橋本隆夫（訳・解説）, エウリピデス『ギリシア悲劇全集６』,（岩波書店, 1991 年）。

松本仁助・岡道男（訳・解説），『アリストテレス「詩学」・ホラティウス「詩論」』,（岩波書店, 1997 年）。

堀尾耕一・野津悌・朴一功（訳），『アリストテレス全集 18』,（岩波書店, 2017 年）。

［二次文献］

岡道男（訳・解説）,『ギリシア悲劇とラテン文学』,（岩波書店,1995 年）。

久保田忠利,「古代ギリシアにおける嘆願について—ギリシア悲劇を中心に—」,『文明研究』第 12 号,(東海大学文明学会,1994 年), 77-87 頁。

Bowen A.J., *Aeschylus: Suppliant Women*,（Oxford, 2013）.

Frisk H., *Griechisches etymologisches Wörterbuch, von ; Bd. 1 - Bd. 3*,(Heidelberg,1960-1972) .

Gould J., 1973. HIKETEIA. *The Journal of Hellenic Studies Vol.93, p.74-103(30 pages).* The Society for the Promotion of Hellenic Studies.

Johnson J.F. & Clapp, D.C., *Athenian tragedy: Education in pity*, in Sternberg(2005), pp.123-164.

Stanford W.B., *Greek Tragedy and The Emotions.* (London, 1983).

Sternberg R.H., *Pity and Power in Ancient Athens*,(Cambridge, 2005).

Tzanetou A., *A generous city: Pity in Athenian oratory and tragedy*, in Sternberg(2005), pp. 98-122.

Wesley E. Thompson., The Marriage of First Cousins in Athenian Society. *Phoenix, Winter, Vol.21, No.4(Winter, 1967), p.273-282.* Classical Association of Canada.

注

（1） 嘆願(*hiketeia*)には主に 2 つの形式があった、嘆願相手身体に触れる一対一の嘆願と、神の祭壇や神域に触れる嘆願である。(Gould,1973: p.75)　嘆願劇では主に後者の嘆願の形が使用される。

（2） 嘆願が拒否される事例については、Gould が取り上げているようにホメロス作品にすでにあらわれている。（Hom. *Il.* vi 45 ff, *Od.* ｘｘｉ.310 ff.）　また嘆願劇の中でも、嘆願が他のポリスによって拒否された事例がある。(E. *Heracl.* 144-146)

（3） *oiktos* の語源はおそらく同義語の *oizys* と同じく、苦痛や悲しみを表す間投詞 *oi* に帰せらる。*eleos* のはっきりとした語源はないが、*eleleu* のような間投詞的起源は排除されない。(s.v. *oiktos, eleos*. Frisk, 1960-1972.)

（4） s.v. *oiktos, eleos*, Liddell & Scott, *A Greek-English Lexicon*, (Oxford, 1996).

（5） Sternberg (2005)は、英語の意味とギリシア語を対応させることを目的とした訳に注意を促しつつ、いまのところ二つの語の意味の違いを引き出そうと言う試みは成功していないとしている。

（6） 嘆願のモチーフを含む劇は多数あるが、本論文では岡道男(1995)の分類を参考に四つの劇を嘆願劇としてとりあげた。

（7） 嘆願劇の訳は筆者訳による、悲劇以外の作品ついては参考文献の邦訳を引用した。

（8） E. *Supp*. 158-159. を参照。同様の神話は Apollod. *Bibliotheca*. 3. 6. 2. にもみられる。

（9） Pl. *Ap*. 34E, 35. を参照。ソクラテスは徳を持つ人物が嘆願を行うことは恥だと述べている。

（10） テセウスは不幸なオイディプスの立場と、自分の立場が入れ替わり得るものだとして、人生の状況の移ろいやすさを理解している。同様の無常感は S. *Ajax*. 121-126. でも語られている。

（11） 残る二作に描かれていたと推測される内容については『ギリシア悲劇全集２』岡道男による「ヒケティデス」解説を参考にした(p.347)。